

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

仏教の時間論についての一考察

村　上　寛　之

時間とは何であろうか。我々は時間の中に生きている。
時間を生きる以上、直観的、気分的には時間を何となく

知っているのだ。が反対に時間を全然正確に知っていない自分を見出すのである。道元も疑着せざれども、これを知らずとこのことを言っている。また、時間は有無についてだけ考えてもあると同時にないと言えるように、二律背反性を含んだもの、弁証法的な性質を持ったものだと言える。弁証法的な性質を持つ時間を定義づけたり、有無を考究することによって時間論が構成される。仏教ではこのような時間を如何に取り扱い、どのような時間論がみられるのであろうか。仏陀は時間のような形而上学的な問題に対して思弁することを避けたが、三世の疑惑を断じて仏陀となつたのは時間に対する考え方は持っていたと思われる。阿含経諸々に現われた仏陀を中心とする原始仏教の時間論は一口に言うならば、過去を恋著せず、未来を希求せず、現在とても堅執しないものとする正しい意味の現在中心、現実主義の宗教的実践的修道的時間論である。この仏陀の時間論をいかに会通するかによつて、種々なる時間論がみられるのである。しかし、どの時間論も時無別体依法而立と言い、時を別体視しない仏陀の時間観を継承していることはいうまでもない。

部派仏教では三世に対する考究が詳細になされた。三世の觀念は部派により経論により相違している。婆沙論、俱舍論によつて三世実有法体恒有を主張する説一切有部の時間論を一つの孤立した流れとするならば、過未無体現有法体仮有を説く經量部大衆部等の立場はもう一つの流れであり、大乘仏教時間論の芽である。しかし、兩者ともに有体、無体を主張するあまり、積極的に現在の構造を明らかにするに至らなかつた。大乘仏教に於いては一切有の説は仏陀の時間矛盾によつて否定して空じる中観の時間論、それは大乘仏教々理を發展せしめる一契機となつたが、否定の否定に終つた感があつた。この中観の時間を空じる立場を受け継いで部派仏教の時間論では考究されなかつた現在を、時を因果關係から考えることによつて、因果同時の現在とし、非常非断と規定することによつて現在から現在へいつも現在である恆時現在とした唯識の時間論、それは諸法が識の所変とする限り、時間も意識的なものとして説かれたので、時間が世界の具體的構造を表すに至らなかつた。等の時間論を経て、以上の諸々の立場を統攝するが如き時間に関して徹

底的な思索と周到な叙述をなした華嚴經に基づく華嚴教學に至つて、仏教の時間論は極まるのである。華嚴に於いては時間が如実に述べられているのは十玄縁起無礙法門に於いてである。十玄縁起とは法界縁起を明らかにするものである。法界とはいふまでもなく世界のことであり、華嚴では種々なる方面から世界を眺めて四法界としてゐる。この中事々無礙法界は事実的存在と事実的存在が何らの実体性を持つことなく互に他を映し合い互に他を在らしめ合つてゐる世界であり、互に無尽の關係にある構造を持つてゐる、これが眞の世界構造であり、この世界を理解するためには重々無尽の縁起によつて、即ち、同時という時の場において、相即相入の論理で以つてしなければならぬ。これが十玄縁起無礙法門である。十玄門で以つて、すべて眞の世界構造を言い表している。亦一門同時具足相応門は一切諸法すべて同時同処に具足相應して一大縁起を成じて前後始終の差別をみずと自体異体相即相入を説く。同時の觀念が強調される。過去、未來、現在の三世の現象は一体の關係を爲して相縁起相統顯現するのである。即ち、一切諸法は現在に於いて姿を

現わし展開する、現在に過去未来を同時具足するのである。同時具足の相はあたかも海の風浪が息んで静かな時森羅万象悉く海面に印現するが如き無明煩惱を滅した清浄なる仏陀の禪定の心中に三世一切の諸法が同時に炳現する海印三昧の如きである。他の九門は諸法の各々について相即相入を説いている。特に時について考察が為されているのは少九十世隔法異成門に於いてである。十世とは過現未の三世に各々三世があつて九世となり、九世が互いに相即相入することによつて、現在の一念や三世即一念に摂されて十世となる。これは九世が同時に現在の一念に存在するのである。これだけに止るならば唯識の現在一念の法から一步も出ないことになる。ここにこの門の中心である隔法異成の思想がある。隔法とは九世が互に隔りを以つて截然と區別されることである。また隔法でなければ三世の區別はなくなり、時がなくなる。単に隔法であれば、三世が異相となり九世の現在の一念への即入が考えられぬから時はなくなる。時が隔法であるとするのは矛盾である。それ故に異成が説かれるのである。異成とは隔法が含む矛盾が異であつて、現在に於

いて際断された九世即ち、隔法が現在の一念に結合されて同時に成立することである。九世は區別された何の連絡もない隔法であり、現在に際断されるから隔法は現在に於いて決定される。即ち、現在一念の法に於いて隔法は結合される。九世の區別された隔法に何らか連絡があれば隔法異成と言えない。だから、隔法異成とは區別され、何の連絡もない隔法が現在の一念に於いて隔法なるが故に異成するのである。これは矛盾を含んでいる。この矛盾は時の根本的な弁証法的な性質によるのであり、ここに突当つて、時の眞の構造が明らかにされたのである。このように華嚴の時間論は、矛盾の矛盾という中観の立場に終ることなく、矛盾を媒介とする隔法異成の思想が事々無礙法界、即ち、眞の現実の世界構造を明した具体的時間論であると言える。時間の弁証法的な性質を究明することは今後に課せられた問題である。